

細胞の状態遷移のオートマトン・モデル

——GPスキーム——

京大・理 西橋幹俊

1. はじめに

生物と計算機とはいくつかの類似点と相違点とがある。類似点の最たるものは、共に基本的な素子から複雑な構造体が構成されていること、そしてそれらがぎざめて合目的的な機能を果すことであろう。一方、相違点としては種々の側面を指摘し得るが、例えば、細胞分裂、分化・発生、自己増殖といった現象は生物に特有である。この分化・発生は、生物学の基本的問題であって、いろいろなレベルで実験的研究や理論的説明がなされているが、未だ十分に解明されてはいない。⁽¹⁾ ここでは、細胞の状態を単純化して有限オートマトンで表現し、その状態集合の連結性に分化に関連づけて論ずる試みについて述べる。

2. GPスキームの定義と生物学的意味

最初にGPスキームの定義を与える。

定義 2.1 GP スキームとは, 三つ組 $\langle n, S, f \rangle$ である,

ここで, (1) n は自然数で, スキームの大きさという。

(2) S は集合 $\{0, 1\}^{2n}$ で, 状態集合とよばれる。

(3) f は作用のパターンとよばれる, $[n]^2$ から $\{a, i, -\}$ への関数である, ここに $[n] \equiv \{1, 2, \dots, n\}$ であり, $\{a, i, -\}$ は作用の集合とよばれる。■

GP スキーム $\langle n, S, f \rangle$ は f を与えれば一意的に決まる。それゆえ簡単に f で示すこととある。

GP スキーム $\langle n, S, f \rangle$ は出力のない自律的有限オートマトン $\langle S, \tau_f \rangle$ とみなすことができる, ここに S は再び状態集合で, τ_f は状態遷移関数である。作用のパターン f が状態遷移関数 τ_f を次のように決定する:

$$s = \begin{pmatrix} s_1, s_2, \dots, s_n \\ s_{n+1}, \dots, s_{2n} \end{pmatrix}, s' = \begin{pmatrix} s'_1, s'_2, \dots, s'_n \\ s'_{n+1}, \dots, s'_{2n} \end{pmatrix} \in S \text{ とする。}$$

このとき $\tau_f(s) = s'$ であるのは,

$$s'_j = \begin{cases} 1 & \text{if } (\forall i \in [n]) (f(i, j) = i \Rightarrow s_i = 0) \& \\ & \{(\exists i \in [n]) (f(i, j) = a \& s_i = 1) \vee s_j = 1\} \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$

$$s'_{n+j} = s_j$$

$$(j = 1, 2, \dots, n)$$

であるとき, そしてそのときに限る。

さて次にこのモデルの生物学的意味に関する注釈をしてお

(1)
 こう。端的に言えば、GPスキームは一つの細胞の状態及びその遷移をごく簡単な形で表現しており、細胞分化をオートマトン理論的に研究するための基本的対象となるように意図されたものである。

例えば動物の成体が単一の受精卵からできてくるためには、細胞の増殖と共に分化が不可欠である。細胞の分化は、簡単には、各細胞種に特徴的な蛋白質の生産に“専念”するようになることで特徴づけられる。この細胞分化の機構に関しては、遺伝情報の総体としてのゲノムは不変であり、遺伝子活性の選択的発現が基本になっていること、それと主として転写段階でなされているであろうことが、最近までの知見から示唆されている。GPスキームは、これらに加えて更に次のような簡単のための仮定をおいて定式化したものである。

- ①ゲノムはオペロンの集まりであり、各オペロンは一つの遺伝子 (gene) を含む。
- ②現象は離散時刻に同期して起る。
- ③「活性化された」遺伝子は次の時刻に、対応する蛋白質 (protein) を産出し、生産された蛋白質は定められた規則に従って (すべての) 遺伝子に作用して、次の時刻に消失する。
- ④蛋白質の遺伝子に対する作用は、活性化、抑制、無効果の3種類とする。
- ⑤遺伝子は抑制されれば不活性になり、抑制がなく活性化されれば活性になり、何も効果的な作用を

受けなければ前の状態にとどまる。

GPスキームの形式的定義と生物学的意味との対比を示しておこう。GPスキームの大きさは、遺伝子もしくは蛋白質の数、 λ_i , λ_{mi} は各 i 番目の遺伝子の活性、 i 番目の蛋白質の存在を（あれば1，なければ0で）表わしている。 $a, i, -$ は各活性化, 抑制, 無効果を表わしている。

3. 効果の切替と消滅

あるGPスキーム f から一つの作用 $f(i, j)$ を変えることによって別なGPスキーム f' が得られる。ここではこのように一つの作用を変えよることの効果について考える。明らかに変化には6種類ある，即ち (1) $a \rightarrow i$, (2) $i \rightarrow a$, (3) $a \rightarrow -$, (4) $i \rightarrow -$, (5) $- \rightarrow a$, (6) $- \rightarrow i$ 。また明らかに次の各ペア，(1)と(2)，(3)と(5)，(4)と(6)は逆の変化である。

定義3.1 作用 a, i を効果的， $-$ を効果的でないという。

変化(1), (2)を効果の切替，(3), (4)を効果の消滅，(5), (6)を効果の現われという。さらに作用 $f(i, j)$ の a から i への切替といった語法を用いる。■

例3.1 f_{99} と f_{100} とを表1のようなGPスキームであるとする。このとき $f_{99}(3, 3)$ の a から i への切替によって f_{99} から f_{100} が得られる。

表1. 大きさ3のGPスキームの例.

ここでは 大きさ n の GP スキーム f を, 任意の $i, j \in [n]$ に対して (i, j) 要素が $f(i, j)$ であるような $n \times n$ 行列で表現する.

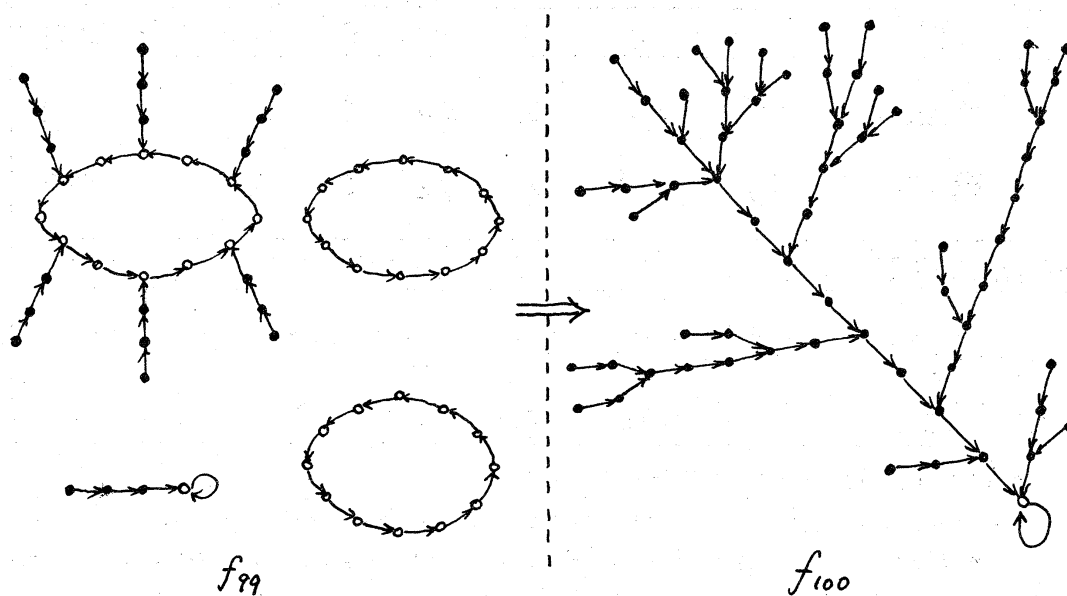
なお 作用が $\{a, i\}$ に限定された GP スキームを全効果型 GP スキームという. 大きさ3の全効果型 GP スキーム全体に, 対応する行列を2進展開に見なして番号をつけた.

$$f_{99} \begin{pmatrix} a & a & i \\ i & a & a \\ a & i & \textcircled{a} \end{pmatrix}$$

$$f_{100} \begin{pmatrix} a & a & i \\ i & a & a \\ a & i & \textcircled{i} \end{pmatrix}$$

GP スキーム f の状態遷移は $\rightarrow$ の作用 $f(i, j)$ が変わると 大き $\leftarrow$ 変わり得る. 例3.1 における f_{99} から f_{100} への変化によって 対応する状態遷移図は 図1 の ように 変わる.

図1. 状態遷移の変化.



	f_{99}	f_{100}
最長周期	12	1
木数	4	1
周期状態数	37	1

ここで木とは状態遷移図全体の中の弱連結部分図で極大なものを意味する。各木は一つの周期的部分図をもつ。上の三つの指標は各、最大長の周期部分図の周期、木の総数、周期部分図の中にある状態の総数を意味する。

大きさ3の全効果型GPスキームの場合における三つの指標の分布を示す。

表2. 三指標の分布.

最長周期	1	2	4	6	12	總計	
總數 [*]	314	31	163	2	2	512	
類數 ^{**}	61	8	33	1	1	104	
木 數	1	2	3	4	5	7	10 總計
總數	139	301	2	53	9	4	4 512
類數	27	58	1	12	2	2	2 104
周期狀態數	1	2	5	10	17	37	總計
總數	139	172	159	24	12	6	512
類數	27	33	32	6	3	3	104

* 対応するGPスキームの総数.

** $[n]$ 上の置換 σ があって任意の $i, j \in [n]$ に対して $f(i, j) = f'(\sigma(i), \sigma(j))$ が成立するならば GP スキーム f' は f に同型であるという。類とはこの同型により定義されるものをいう。

表2から各指標において大きい方の値を実現するのはかなり少数のGPスキームであることがわかる。

次にGPスキームの一つの作用を変えることに sensitive な状態について考察する。

定義3.2 一つのGPスキーム f から作用 $f(i, j)$ を変えることによって別のGPスキーム f' が得られるとし、オートマトン $\langle S, \tau_f \rangle, \langle S, \tau_{f'} \rangle$ が、各 f, f' に対応するとする。このとき $\tau_f(s) \neq \tau_{f'}(s)$ であるとき s としてそのときのみ、 $s \in S$ は $f(i, j)$ に sensitive であるという。■

$\begin{pmatrix} * & \cdots & * \\ * & \cdots & * \end{pmatrix}$ の形の状態は皆 $f(i, j)$ に sensitive でないことは容易に検証できる、ここで $*$ は $\{0, 1\}$ の任意の記号を意味し、 i はこの場合 $s_{nti} = 0$ であることを示している。以後類似の記法をしばしば用いる。さらに $\begin{pmatrix} * & \cdots & * \\ * & \cdots & * \end{pmatrix}$ の形の状態で $f(i, j)$ に sensitive であるか否かは次の要素によって決まることも容易に検証できる； s_j の値、 $f(1, j), \dots, f(n, j)$ の値、そして変化の種類。

これから $f(i, j)$ に sensitive な状態の数を計算してみよう。

6種の変化のうちで逆の変化は定義3.2により同数の sensitive な状態をもつ。そこで残る3種の変化——効果の切替、活性化の消滅、抑制の消滅について考え、それぞれに対応した sensitive な状態の数を N_s, N_a, N_i と書くことにしよう。

今 n を与えられた GP スキームの大きさとし, p は $i \neq i'$ かつ $f(i', j) = a$ であるような $i' \in [n]$ の数, q は $i \neq i'$ かつ $f(i', j) = i$ であるような $i' \in [n]$ の数とする。このとき次の命題が成り立つ。

命題 3.1. (1) $N_a = 2^{2n-2-p-q}$
 (2) $N_i = 2^{2n-1-q} - 2^{2n-2-p-q}$
 (3) $N_s = 2^{2n-1-q}$

証明. いま $f(1, 1)$ の変化を考え,

$$f(i, 1) = \begin{cases} a & i = 2, \dots, 1+p \\ i & i = 2+p, \dots, 1+p+q \\ - & i = 2+p+q, \dots, n \end{cases}$$

と仮定する。証明は容易に一般化できる。

(1) この場合 $\Delta \in S$ が sensitive であるのは Δ が

$\left(\begin{array}{cccccccc} 0 & * & \dots & \dots & * \\ 1 & \underbrace{0 \dots 0}_p & \underbrace{0 \dots 0}_q & * & \dots & * \end{array} \right)$ の形であるとき, そしてその時に限ること

が示される。したがって Δ の成分の中で自由に決められる

もの数は, $(n-1) + (n-1-p-q) = 2n-2-p-q$ であるから,

$$N_a = 2^{2n-2-p-q}.$$

(2) この場合は sensitive な状態は 2つの形, $\left(\begin{array}{cccccccc} 1 & * & \dots & \dots & * \\ 1 & \underbrace{* \dots *}_p & \underbrace{0 \dots 0}_q & * & \dots & * \end{array} \right)$

と $\left(\begin{array}{cccccccc} 0 & * & \dots & \dots & * \\ 1 & \underbrace{0 \dots 0}_p & \underbrace{0 \dots 0}_q & * & \dots & * \end{array} \right)$ とに分けられる, ここで $(0 \dots 0)$ は少なくとも

一つの記号が 0 でないことを意味する。

1. 前者の場合. 自由に決められる成分の数は,

$$(n-1) + (n-1-q) = 2n-2-q \text{ であるから, } N_1 = 2^{2n-2-q}$$

2. 後者の場合. 自由に決められる成分の数は

$$(n-1) + (n-1-p-q) = 2n-2-p-q \text{ であるから, } N_2 = 2^{2n-2-p-q} \left(2^p - 1 \right)$$

$$\text{よって } N_i = N_1 + N_2 = 2^{2n-1-q} - 2^{2n-2-p-q}$$

(3) 場合(1)と同様. $\blacksquare$

$$\text{系 3.2} \quad (1) 2^{n-1} \leq N_a \leq 2^{2(n-1)} \quad (2) 2^{n-1} \leq N_i \leq 2^{2n-1} - 2^{n-1}$$

$$(3) 2^n \leq N_s \leq 2^{2n-1}$$

証明. $0 \leq p, q, p+q \leq n-1$ であることに注意すれば容易. $\blacksquare$

この系の意味を考えよう。最初に sensitive な状態の割合

$$R_x = N_x / 2^{2n} \text{ を考える, ここで } x \in \{s, a, i\}. \text{ 例えは,}$$

$1/2^{n+1} \leq R_a \leq 1/2$ で $0 \leq \lim_{n \rightarrow \infty} R_a \leq \frac{1}{4}$. 同様に $0 \leq \lim_{n \rightarrow \infty} R_i$, $\lim_{n \rightarrow \infty} R_s \leq \frac{1}{2}$. こういった範囲内で sensitive な状態の数や割合は, $f(i, j)$ の“文脈”即ち p, q に依存して変わる。次に N_x の最大値や最小値を実現する作用のパターンを示す。

表 3. N_x の最大値及び最小値の実現

x	a	i	s
max.	$\begin{pmatrix} a & & \\ - & & \\ \vdots & & \\ - & & \end{pmatrix} *$	$\begin{pmatrix} i & & \\ a & & \\ a & & \\ \vdots & & \\ a & & \end{pmatrix} *$	$\begin{pmatrix} a & a & i \\ a & a & - \\ a & a & - \\ \vdots & & \\ a & a & - \end{pmatrix} *$
min.	$\begin{pmatrix} a & & \\ a & a & i \\ a & a & i \\ \vdots & & \\ a & a & i \end{pmatrix} *$	$\begin{pmatrix} i & & \\ i & & \\ i & & \\ \vdots & & \\ i & & \end{pmatrix} *$	$\begin{pmatrix} a & a & i \\ i & & \\ i & & \\ \vdots & & \\ i & & \end{pmatrix} *$

ここでは、命題 3.1 で示した特別な場合における N_x の
最大値及び最小値を実現する作用のパターンを示した。

これまで我々は sensitive な状態の観点から、一つの作用を
変える効果を調べてきた。全体の状態遷移の様子、例えば、最
長周期や木数等への効果を考えることは相当煩雑なようであ
る。

4. 強連結性.

GP スキームのいくつかの集合についてその強連結性を議
論する。

定義 4.1. 大きき n の GP スキーム全体の集合を F_n で表わす。

また F_n 上の二項関係 $\leq$ を次のように定義する:

$$f_1 \leq f_2 \stackrel{\text{def.}}{\iff} (\forall i, j \in [n]), \\ \{f_1(i, j) \text{ キー} \Rightarrow f_1(i, j) = f_2(i, j)\}. \quad \blacksquare$$

補題 4.1. F_n 上のこの関係 $\leq$ は順序関係であって, $(F_n, \leq)$ は
半順序集合である。各全効果型 GP スキームはその極大元,
 $f_0 \equiv -$ は最小元である。 $\blacksquare$

GP スキームの一つの集合 $G \subset F_n$ は次のように入力のあ
る一つの有限オートマトン $\langle S, G, \delta \rangle$ と見做すことができる。

S : 状態集合

G : 入力アルファベット

δ : 状態遷移関数 $S \times G \rightarrow S$

$$S(A, f) = T_f(A) \quad \text{for } A \in S, f \in G.$$

このとき G の強連結性が議論できる, 即ち $\begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}$ でない任意の $A, A' \in S$ に対して適当な G の元 f とすることにより, 遷移 $A \rightarrow A'$ が実現できるか否か。

命題 4.2. 大さ n を固定する。単一の GP スキームから成る集合は強連結でない。全効果型 GP スキーム全体から成る集合は (従って GP スキーム全体から成る集合は) 強連結である。

証明. 前半を証明するには任意の GP スキーム f に対し, T_f が 1 対 1 でないことを示せば十分である。いま $f(i, j) = -$ であるような $i, j \in [n]$ があるならば, A_{n+i} でのみ異なる二つの状態 $\begin{pmatrix} * & \cdots & * \\ * & \cdots & * \end{pmatrix}_i, \begin{pmatrix} * & \cdots & * \\ * & \cdots & * \end{pmatrix}_i$ は次の時刻に同一の状態に移る。よって f が全効果型である場合について考えれば十分である。さらに $i_0 \in [n]$ があって任意の $j \in [n]$ に対し $f(i_0, j) = a$ となるならば $T_f\left(\begin{pmatrix} 1 & \cdots & 1 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}_{i_0}\right) = T_f\left(\begin{pmatrix} 1 & \cdots & 1 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 1 & \cdots & 1 \\ 1 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$. よって任意の $i \in [n]$ に対して, $f(i, j) = i$ であるような $j \in [n]$ が存在する場合に更に限定して考えてよい。これには二つの場合がある。第一に任意の $j \in [n]$ に対して, $f(i, j) = i$ であるような $i \in [n]$ が存在する場合。このとき $T_f\left(\begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 1 & \cdots & 1 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}$ であるがもちろん $T_f\left(\begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}$ であるので T_f は 1 対 1 でない。第二にある $j_1 \in [n]$ が存在して任意の

$i \in [n]$ に対して $f(i, j_1) = a$ となる場合。このときは、「任意の $i \in [n]$ に対して $f(i, j_1) = a$ 」であるような j_1 に対応する s_{n+j_1} でのみ異なる二つの状態 $\begin{pmatrix} * \dots * & 1 \dots 1 \\ 1 \dots 1 & \underline{1 \dots 1} \\ & a \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} * \dots * & 1 \dots 1 \\ 1 \dots 1 & \underline{0 \dots 0} \\ & a \end{pmatrix}$ は次の時刻に同一の状態 $\begin{pmatrix} 0 \dots 0 & 1 \dots 1 \\ * \dots * & \underline{1 \dots 1} \\ & a \end{pmatrix}$ に移る。以上により、一般的に τ_f が 1 対 1 でないことが証明された。

後半を証明するために $\begin{pmatrix} 0 \dots 0 \\ 0 \dots 0 \end{pmatrix}$ でない任意の 2 状態 $s, s' \in S$ に対して具体的な遷移 $s \rightarrow s'$ を示す。 s は $\begin{pmatrix} 0 \dots 0 \\ * \dots * 1 * \dots * \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} * \dots * 1 * \dots * \\ 0 \dots 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} * \dots * 1 * \dots * \\ * \dots * 1 * \dots * \end{pmatrix}$ のいずれかの形をしている。 s が $\begin{pmatrix} 0 \dots 0 \\ * \dots * 1 * \dots * \end{pmatrix}$ の形をしているならば f_1 として任意の $i, j \in [n]$ に対して $f_1(i, j) = a$ であるような GP スキームをとれば $\tau_{f_1}(s)$ は $\begin{pmatrix} * \dots * 1 * \dots * \\ 0 \dots 0 \end{pmatrix}$ の形になる。 s が $\begin{pmatrix} * \dots * 1 * \dots * \\ 0 \dots 0 \end{pmatrix}$ の形をしているならば、 f_2 として大抵すべての任意の GP スキームをとれば $\tau_{f_2}(s)$ は $\begin{pmatrix} * \dots * 1 * \dots * \\ * \dots * 1 * \dots * \end{pmatrix}$ の形になる。このようにして $\begin{pmatrix} 0 \dots 0 \\ 0 \dots 0 \end{pmatrix}$ でない任意の状態 s は 2 ステップ以内の遷移で $\begin{pmatrix} * \dots * 1 * \dots * \\ * \dots * 1 * \dots * \end{pmatrix}$ の形の状態になる。この状態から 2 ステップ以内のようにして任意の状態 s' へ到達することができる。いま f_3, f_4 を次のような GP スキームとする。

$$f_3(i, j) = \begin{cases} \hat{s}_{n+j} & \text{if } i = k \\ a & \text{otherwise} \end{cases} \quad (j = 1, \dots, n)$$

$$f_4(i, j) = \begin{cases} \hat{s}_j & \text{if } i = l \\ a & \text{otherwise} \end{cases} \quad (j = 1, \dots, n)$$

ここで
$$\delta'_i = \begin{cases} a & \text{if } \delta_i = 1 \\ i & \text{if } \delta_i = 0 \end{cases} \quad (i=1, \dots, 2n)$$

このとき
$$\begin{pmatrix} * & \dots & * & \overset{l}{1} & * & \dots & * \\ * & \dots & * & \underset{l}{1} & * & \dots & * \end{pmatrix} \xrightarrow{f_3} \begin{pmatrix} \delta'_{n+1}, \dots, \delta'_{2n} \\ * & \dots & * & \underset{l}{1} & * & \dots & * \end{pmatrix} \xrightarrow{f_4} \begin{pmatrix} \delta'_1, \dots, \delta'_n \\ \delta'_{n+1}, \dots, \delta'_{2n} \end{pmatrix}. \quad \blacksquare$$

次に GP スキームの集合のあるクラスを定義しその強連結性について考える。

定義 4.2. GP スキームの集合 $G \subset F_n$ が無矛盾であるとは

ある GP スキーム $\hat{f} \in F_n$ が存在して, 任意の $f \in G$ に対して $f \leq \hat{f}$ が成り立つこと。GP スキームの無矛盾集合 G が集合として極大であるとき, 極大無矛盾集合であるという。

ある GP スキーム $f \in F_n$ が与えられたときそれに対応する無矛盾集合 $[f]$ を $[f] = \{f' \in F_n \mid f' \leq f\}$ で定義する。 $\blacksquare$

定義 4.3 GP スキーム f が与えられているとする。 f が i

から j への a^+ 道をもつとは, $[n]$ 上の置換 σ と $k \in [n-1]$

とが存在して, $i = \sigma(1)$, $j = \sigma(k)$, かつ任意の $l \in [k]$ に対し

で $f(\sigma(l), \sigma(l+1)) = a$ が成り立つことである。 f が a サイクル

をもつとは $[n]$ 上の巡回置換 σ が存在して, 任意の $i \in [n]$

に対して $f(i, \sigma(i)) = a$ が成り立つことである。 $\blacksquare$

注意. GP スキーム f が a サイクルをもつのは, 任意の i, j

$\in [n]$ に対して f が i から j への a^+ 道をもつときとしてそ

のことに限る。 $\blacksquare$

命題 4.3. 無矛盾集合 $[f]$ が強連結であるための必要十分条件は次の二つの条件が共に成り立つことである。

(1) f が α サイクルをとつ。

(2) $\forall j \in [n] \exists i \in [n] \text{ s.t. } f(i, j) = i$

証明. 必要) (1) 任意の $i, j \in [n]$ に対して 遷移 $\begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & 1 & \cdots & 0 \\ & & i & & \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} * & \cdots & * & 1 & * & \cdots & * \\ * & \cdots & * & * & * & \cdots & * \end{pmatrix}$ には f が i から j への α 道をとつことが必要である。

(2) 「任意の $i \in [n]$ に対して $f(i, j_0) \neq i$ である」ような $j_0 \in [n]$ が存在するならば 遷移 $\begin{pmatrix} * & \cdots & * & 1 & * & \cdots & * \\ * & \cdots & * & * & * & \cdots & * \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} * & \cdots & * & 0 & * & \cdots & * \\ * & \cdots & * & * & * & \cdots & * \end{pmatrix}$ は不可能である。

十分) $A = \begin{pmatrix} a_1 & \cdots & a_n \\ a_{n+1} & \cdots & a_{2n} \end{pmatrix}, A' = \begin{pmatrix} a'_1 & \cdots & a'_n \\ a'_{n+1} & \cdots & a'_{2n} \end{pmatrix} \in S,$

$A, A' \neq \begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}$ とする。いま f, A' から $f_i (i=1, 2, 3)$ を次のように定義する:

$$f_1(i, j) = \begin{cases} - & \text{if } f(i, j) = i \\ f(i, j) & \text{otherwise} \end{cases}$$

$$f_2(i, j) = \begin{cases} - & \text{if } a'_{mj} = 1 \text{ \& } f(i, j) = i \\ f(i, j) & \text{otherwise} \end{cases}$$

$$f_3(i, j) = \begin{cases} - & \text{if } a'_f = 1 \text{ \& } f(i, j) = i \\ f(i, j) & \text{otherwise} \end{cases}$$

明らかに $f_i \leq f (i=1, 2, 3)$.

こゝで次の遷移が可能である。

$$\begin{pmatrix} \delta_1, \dots, \delta_n \\ \delta_{n+1}, \dots, \delta_{2n} \end{pmatrix} \xrightarrow{f_1^+} \begin{pmatrix} 1 \dots 1 \\ 1 \dots 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{f_2} \begin{pmatrix} \delta'_{n+1}, \dots, \delta'_{2n} \\ 1, \dots, 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{f_3} \begin{pmatrix} \delta'_1, \dots, \delta'_n \\ \delta'_{n+1}, \dots, \delta'_{2n} \end{pmatrix}. \quad \blacksquare$$

大きさを固定して考える。命題4.1は単一のGPスキームから成る集合はどれも強連結ではないが、いくつかのGPスキームの集合を考えると強連結になり得ることを示している。どのような集合が強連結であってどのようなものがそうでないか。いま効果の切替あるいは消滅の一方のみでGPスキームを出来得る限り変える場合を考えてみよう。前者の場合、全効果型GPスキーム全体の集合が得られる。これは、 2^{n^2} 個の要素から成り命題4.1により強連結である。後者の場合は 2^{n^2} 個の極大無矛盾集合が得られ、これらもいづれも 2^{n^2} 個の要素(GPスキーム)から成る。この場合には命題4.2により強連結な極大無矛盾集合もあればそうでないものもある。簡単に言えば、効果の消滅か効果の切替と、状態集合を“つなぐ”ことに関して同じ効果をもつためには、一定量の効果的な作用と、一定のパターンとが必要でありかつ十分でもあるといふことである。

5 終りに

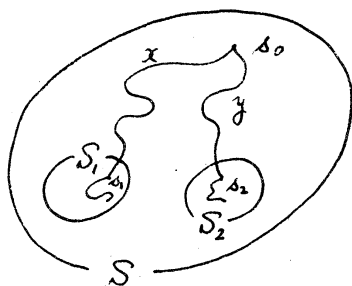
各生物種には固有の遺伝情報があり、これに対応した蛋白質を生じ、蛋白質と遺伝子との相互作用を生じる。この相互作用のパターンは「時」によってあるいは「場所」によって

異な、たものであり得るかその可能性の総体は種によって限定されている。その限定のされ方に対応するものとして我々は無矛盾集合 $G \subset F_n$ を考えた（これをアルゴバット制限とよぼう）。一方各細胞は時と共に異なった細胞環境に遭遇してその「内部状態」を変えていくであろう。この細胞環境の時系列の可能性の総体に対応するものとして $\mathcal{F} \subset G^*$ を考える（これを系列制限とよぼう）。この $\mathcal{F}$ を用いて例えれば次のような細胞分化の一つの定式化を得る。いま初期状態 $\alpha_0 \in S$ と系列制限 $\mathcal{F} \subset G^*$ とが与えられたとする。まず $\alpha, \alpha' \in S, x \in \mathcal{F}$ に対して $x(\alpha) = \alpha'$ であるとは次の成り立つことである：

$$x = f_i \quad (f_i \in G) \Rightarrow x(\alpha) = \tau_{f_i}(\alpha)$$

$$x = f_n x' \quad (f_n \in G, x' \in G^*) \Rightarrow x(\alpha) = \tau_{f_n}(x'(\alpha))$$

いま $x, y \in \mathcal{F}, x(\alpha_0) = \alpha_1, y(\alpha_0) = \alpha_2$ で、



$$(\exists S_1, S_2 \subset S) \{ (S_1 \cap S_2 = \emptyset) \&$$

$$(\forall z \in G^*) (xz \in \mathcal{F} \Rightarrow z(\alpha_1) \in S_1) \&$$

$$(\forall u \in G^*) (yu \in \mathcal{F} \Rightarrow u(\alpha_2) \in S_2) \}$$

であるとき、 x を経由したセル α_1 と

y を経由したセル α_2 とは相互に分化

しているといふのは自然であろう。このように細胞分化を考えるには系列制限 $\mathcal{F} \subset G^*$ に関する考察が必要であると思われる。ところでアルゴバット制限 $G \subset F_n$ は概念として系列制限

$\mathcal{A} \subset G^*$ の一部分である。本稿では手はじめとしてアルファベット制限のレベルで相互作用のパターンの違いが強連結性等に及ぼす効果について二、三の考察をした。

最後にこの線上で今後すぐ手のつけられそうな問題を二、三挙げておこう。

(1) 状態集合 $S \equiv \{0, 1\}^{2^n}$ から蛋白部への射影によって状態集合 $\tilde{S} \equiv \{0, 1\}^n$ を得る。ここでの強連結性の議論はどうなるか。特に効果的な作用が疎にしかない場合について。

(2) 刻々における遺伝子の活性と蛋白質の存在について一定の制限をおく（例えば一定の範囲の割合でなければならぬなど）。この条件をみたす状態の集合を $\tilde{S} \subset S$ とする。 $\tilde{S}$ での強連結性の議論はどうなるか。

(3) 強連結な極大無矛盾集合に対して、それぞれ対応する強連結な極小部分集合を考える（ここでの極小性の定義の仕方にはいくつかのやり方がある）。このとき極小部分集合の“小ささ”の、極大スキームのパターンへの依存性はどうか。

謝辞. 有益な議論と助言を与えて下さった西尾助教授, 小淵博士はじめ研究室の方々に感謝します。

文献 (1) 例えば 山名清隆 (1977) 科学 Vol. 47 No. 2 pp 66~73, 岩波現代生物科学 4. 発生 pp. 185~226. (2) G. T. Isderman / G. Rosenberg, Developmental Systems and Languages, North-Holland / American Elsevier (1975)